別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　楊　志強

楊志強氏の提出した「「苗」から「苗族（ミャオ族）」へ――近代民族集団の形成及び民族的アイデンティティ再構築の過程について――」と題する学位請求論文は、「多民族国家」中国の南部に居住するミャオ族（苗族）について、その民族集団がどのような歴史的プロセスを経て形成されて来たのかという課題を設定し、とくに、１９８０年代以降の所謂「伝統の創出」のプロセスを詳細に検討して、作為された「民族的なアイデンティティ」の問題を論じた刺激的な論考である。

本論文が対象とする「苗」とは、もともとは中国南方の非漢民族系住民に漢民族があたえた汎称であった。その概念は、近代的な「民族」としてではなく、むしろ中華帝国の伝統的な「華夷之弁」にもとづく概念として認識されるのが適切である。しかし、中国が近代国家への変容を開始した２０世紀初頭になると、漢民族の民族主義が高揚しただけでなく、「苗」も近代的な民族集団としての「苗族」としてイメージされるようになった。しかし、中国においては長い歴史を通じて、漢民族が他の民族に対して絶対的な優位性を一貫して有し続けてきており、近代以降の「民族」に関する言説についても、漢民族文化の言説に基づいて展開されざるを得ず、そのため周辺の少数民族は漢民族によって設けられた「他者との境界」に由来する一方的なイメージを抜きにして、民族形成を進めることができなかった。本論文はこの点に焦点をあてて、苗族の「民族」形成に見られる「他者性」の問題を指摘し、その具体的な内容を検討する。

こうした歴史的分析に引き続いて、本論文は１９８０年代以降の「改革・開放」政策と新たな民族政策によって引き起こされた、苗族の「民族意識」の「覚醒」現象を取り上げ、民族的アイデンティティの再構築に関わる諸問題について検討を加えた。本論文の後半を占めるこの部分は、本論文のもっとも注目すべき貢献と思われる。本論文によれば、漢族の歴史に由来する「他者」の眼から見た場合、「苗族」は「極めて悠久な歴史を有する民族」として認識される一方で、苗族の内部は文化的にみて千差万別であり、「われわれの意識」としての民族的アイデンティティも過去にはごく一部分の苗族知識人にしか存在していなかったが、人民共和国建国後に「民族」を基本単位として政治に参画する「多民族国家」体制が確立されると、苗族の内部でも徐々に「アイデンティティ」の形成が始まり、「文革」の一時期にはおおきく後退したものの、１９８０年代に至って、民族のアイデンティティを新たに作りあげる時期が到来した、という。

上述の諸点を踏まえ、本論文は前後両編に分けて行論を展開している。前編では、主に漢文によって記された歴史史料の解読を通じて、王朝時代、中華民国期、中華人民共和国初期の各々大きく異なる時期における苗族の諸相について分析を加えた。後編は１９８０年代以降の苗族知識人による民族的アイデンティティ再構築の過程を詳細に再構成しており、その歴史的な経緯から、本論文はこの時期を民族的アイデンティティの「他者形成」から「自己形成」への変換期として位置づける。

前編は、もともと漢民族による南方非漢民族系族群に対する汎称であった「苗」が、「他者」によってどのように「苗族」という近代民族集団に変貌したのかについて、その歴史的な背景及び変化のプロセスからの解明を試みる。第一章は、王朝時代に於ける「苗」が、漢文化側・王朝文化、・政治体制の中で、そもそもどのような意味合いを持っており、またそれがどのように変化して行ったのかについて論じている。第二章は、清末に始まる近代国家への移行期に、漢民族によって発せられた民族主義の言説によって、「苗」がどのように「中国での最初の民族」として想像されたのかについて、清末の漢民族知識人、とりわけ日本に留学した漢民族知識人の論説によって検討した。また、この時期、日本の学者鳥居龍蔵から始まる「苗族」に関する「広義の苗族」と「狭義の苗族」という区分がどのような根拠に基づいたものであったのか、民国期に近代教育を受けた少数の「苗夷」出身の知識人たちに見られる「民族的アイデンティティ」はどのような内実を持っていたのか、人民共和国建国後の民族識別においてなぜ苗族が公認の少数民族に数えられたか、などの問題の解明を試みた。

後編は、１９８０年以降の「改革・開放」政策の実施及び民族政策の回復にともなって生じた苗族社会に見られる民族的アイデンティティの再構築をめぐる一連の過程について、四章に分けて論じている。第三章は、８０年代初期に木像「苗女」を巡って苗族社会に起こった論争を取り上げ、苗族知識人たちの「民族意識」の激動の状況を論じた。第四章は、主として８０年代末期に成立した「貴州苗学会」およびその活動を中心に、苗族知識人たちによって展開された「苗学」の内容およびその性格を明らかにしようとした。第五章は、「苗族」としての民族的アイデンティティの強化を図るために、知識人が如何にして、新たな「民族伝統」を想像し、作り上げたのか、などの問題に関連する具体的な過程やその内容を明らかしようとした。この新たな「伝統」の中で最も注目すべきは、１９９０年代中期から現在にかけて続けられている苗族の共同祖先の再確認――「蚩尤の名誉回復」を巡る一連の動向である。第六章は、８０年代以降の世界各地の苗族と中国苗族との「国境」を越える連携活動について論じ、ついで、９０年代以降の中国における「愛国主義教育運動」の中で、漢民族社会で巻き起こった「炎黄ブーム」と苗族社会で発生した「蚩尤ブーム」との対立関係について論述した。そして、近代以来に形成された「中華民族」と「炎黄の子孫」という国家統合を巡る二つの言説を整理し、両者の相互関係を分析している。

以上、本論文は、歴史的な漢文史料を大量に利用するとともに、筆者自身がそれに属する現在の苗族知識人社会から発信されている膨大な情報を利用して、独創的な研究成果を達成している。民族形成過程に「他者性」の視点を導入して説得的な議論を展開したこと、近年のアイデンティティ再構築過程を論じて、現代中国の民族問題を考察する際の重要な視点を提供したこと、などは、とくに指摘すべき貢献であろう。

審査においては、苗族の事例が他の少数民族の事例とどのように関連するのか、１９６０年代から７０年代の民族社会の状況について、十分に分析していないのではないかなどの点が指摘された。しかしながら、審査委員会は、こうした弱点は本論文の従来の研究史に対する画期的な貢献を否定するものではなく、本論文は博士論文として必要な水準を十分に達成していると判断した。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。